

で仕上げられた。

海賊行為の法的研究者で海上警察権論を書きあげた。その間、国会から西ドイツ、アメリカに派遣されて議員証言法の改正調査に精通した、がんばり屋の少ない法政に明るい国会議員として重きをなした飯田忠雄氏である。

(社)引揚者団体全国連合会

副理事長 結城 吉之助)

渡満から引き揚げ後の労苦

石川県 久木 孝作

渡満の動機

私は昭和二年三月石川県立小松商業学校を卒業、昭和四年一月金沢歩兵第七連隊へ現役兵として入隊し、五年七月帰隊除隊したが、その頃日本国内は大変不況であって朝鮮や満州から従業員募集が沢山来ていた。そこで私の心は大陸に動いた。

丁度二年先輩の浅井忠雄君が一年志願兵を終えて満鉄の経営している撫順炭鉱へ就職していたので、早速就職について問い合わせたところ渡満するようにと返事が来たので、同年九月五日神戸港から船で出発したのである。

三日目に大連港につき、大連駅からは四フィート八インチという広軌な汽車に乗り、車中一泊して奉天駅で撫順線に乗り替え約一時間で撫順駅に着く。浅井君は駅まで出迎えてくれた。

満鉄撫順炭鉱への就職

浅井君の出迎えを受けて彼の宿舎に行く。平屋建のやや広い一室である。彼は古城子採炭所(東洋一の大露天掘)の電気機関車の運転手で日勤と夜勤がある。私は留守番で炊事当番をすることとなった。忘れもせぬが米一升が十銭立派な白菜の大きいのが一株二銭煙草の安いのが十本入一箱一銭八厘で物価の安いのは驚いた。

十一月炭鉱の古城子採炭所で労務係員を採用するというので早速履歴書を提出した。三人採用なのに十五、

六人採用試験に来ていたが二、三日して幸運にも採用の通知が来た時は本当に嬉しかった。これが二十一年引き揚げまで十六年間の満鉄生活のスタートである。

在撫中の十六年間

昭和五年十一月炭鉱へ採用になったので先に結婚して郷里の小松市の自宅に残して来た妻歌子を早速撫順へ呼び寄せ二人の家庭生活が始まった。そして昭和六年十一月には長男繁忠、十五年六月には長女陸子が、十七年十月には次男義則が生まれ五人家族となる。

一方私は古城子採炭所の労務係に一か年余りいて機械工場庶務係へ転任しここに五か年いて更に元の古城子採炭所経理係へ再転任し、終戦の二十年一月まで約九年間勤務、同年二年牡丹江省八面通に光義炭田を開発することになり開発事務所の経理科副科長として約百人と共に牡丹江へ転出する。光義炭田は埋蔵量約三億トン、二か年で事業費約一億四千万円の計画であった。

応 召

二十年七月十四日だと思いが銀行から支払資金引出しのため光義から牡丹江市へ出て、リュックサックに

一杯紙幣を詰め込み十五日の朝、八面通の光義へ帰るべく八時牡丹江駅発の汽車に乗っておると「光義炭鉱の久木さんおられましたら撫順から電話です」との呼び出しがあるので何事かと思つて駅長室へ行つて電話機を取ると、召集令状が来て十九日山海関の近くの阜新の部隊へ入隊せよとのことである。私達は特殊勤務で召集されないことになっていたのだが、撫順から牡丹江へ転出した時にその手続きがなされていなかったことが後で解つたが、今は取敢えず撫順へ帰らねばならぬ。直ちに撫順へ帰る準備にかかる。

光義炭鉱開発事務所小川所長のはからいでその夕方料亭で送別会をしてもらい終列車に乗り込んで撫順へ帰つたのである。

阜新の部隊へ

撫順の我が家が一泊して十九日山海関近くにある阜新に向かった。入隊してみると召集兵ばかりである。

しかも開拓団からの人が多い。知つた者は撫順から林君と云うのが一人いた、新潟出身の男である。

私は金沢の歩兵第七連隊を除隊する時、下士官適任

証書というものをもらっているので兵隊の中では最右翼の位である。そこで間もなく伍長に任官するのとことで特務曹長（給与担当）の助手をせよと命ぜられた。入隊をしたが被服も靴も支給されない。家から着て行ったままの服装である。銃は三人に一丁程度しかなく、訓練は上半身裸で裸足に無帽といったお粗末な姿である。

八月に入ってから、近くの者で家に武器のある者は外泊を許すから持って来いということである。私は撫順の家日本刀を一振持っていたので申し出ると、「君は間もなく伍長に任官するのだから取って来い」との許可で早速撫順へ取りに帰った。二泊ほどもらったように思う。そして六日に阜新へ帰り駅へ下車すると沢山の兵が駅のプラットホームにいるではないか。これはどうしたのかと聞くと「部隊の一部はこれから北支へ匪賊討伐に出動するためこの汽車に乗るのだ。」君達は留守居だとのことであった。

ソ連軍の参戦

本隊へ帰り一日経た八日の夜半非常呼集がかかった

ので何事ならんと思つたら、ソ連が参戦したので、これから北滿に向かつて出動だとのことである。そして直ちに汽車に乗せられ奉天、撫順を通りどんどん北東に進み通化で下車させられた。それからが行軍で目的地も示されず山の中を毎日行軍又行軍である。

十六日は山を下つて里へ出たところ、汽車で先行していた数人の兵が部隊を迎えにやつて来たのである。それは部隊長に十五日終戦の詔勅があつたことを告げに来たのであるが、部隊長から公表はされないものどこからともなくそのことがこそ話として流れて来たのである。しかし隊員はむろん信じられない、それはデマであろう。うっかり話したら大変なことになるといいながら着いたのが滿州と朝鮮の境、虎林という小さな街であった。

早速天幕を張り各小、中隊毎に野営の準備をする。

日本降伏終戦

八月十九日の夜半各中隊長は伝令を連れて大隊本部に集合せよとのことであった。特務曹長の助手をしている私は、中隊長の伝令として隊長と共に急ぎ大隊長

の所へ行くと大隊長から正式に「十五日日本は降伏した。明二十日ソ連軍が関東軍の武装解除をするのでこの部隊は明朝解散する。階級章、奉公袋、襟章等は今夜中に適当に始末してしまえ。明朝六時に奉天行き汽車が出るからリュックサック（背囊の代用）に二分の食料を入れて帰宅せよ。途中中国人に対しては絶対抵抗しないように」との命令である。更に武器と残務整理のため将校の外各中隊に一個分隊残るようにとのことであった。これは大変なことだと早速中隊長と共に中隊へ戻り中隊長から全隊員にこの旨伝達された。

そこで残留する一個分隊について如何にするかという事になり、それでは希望者をつのろうということになり希望者を募ったところ日本からの転属者、或いは家族のいない者がいて我が中隊の残留者は決まった。残留分隊に分隊長として下士官が一人残らねばならぬのだが不幸中のさいわいといおうか、私はまだ伍長に任官していなかったばかりに難を逃れたのである。残ったのは短期現役の新任伍長であった。

残った将校と兵はその後、ソ連に送られたと思うと気の毒でならない。

避難列車

二十日の朝汽車に乗り奉天に向かって出発したが奉天までは二日ほどかかる。途中通化辺では来る列車も来る列車も朝鮮人の避難民で乗客は超満員である。デッキにぶら下がる者、屋根の上に馬乗りになっている者、機関車の前にまでぶら下っている状態である。かくして汽車は二十二日頃と思うが奉天の手前、我が家のある撫順駅に着いたのでやれやれと安堵の気持ちで私は下車した。一行のほとんどは阜新地区の開拓団の人達でこれから奉天を通って、まだ西へ行かねばならぬ。その時撫順駅で下車した者は五、六人であった。この駅は撫順城、即ち中国人街にあり我が家までは四キロほどあるので馬車に乗った。

商売に抜け目のない中国人の物売りがプラットホームに押し寄せている。暫く見ていると汽車の中の避難民がプラットホームへ降りて来て物を買いはじめたと思つたらいつの間にか暴動化して大混乱となり物のうば

いあいである。これは大変だと一目散に我が家へ逃げ帰ったのである。

家には勤労奉仕で開拓団へ行っていた中学三年生の長男繁忠も辛い帰っており家族は私の帰宅を夢かと思わんばかり驚き喜んでくれました。

しかし私達を乗せて来た列車もそれから後続の列車も奉天が混乱状態のため全員撫順駅で下車して撫順のお寺や学校に収容され、約一か月帰宅することが出来なかった。

又後続の列車が途中の駅で火薬が爆発して日本人避難民多数死傷するという惨事も起き、私の知人の一家は本人を残し全員が死亡という悲惨なめに遭った。

召集兵のソ連送り

私は幸い部隊長の気転で部隊解散により我が家へ帰ったが、撫順の学校やお寺には沢山の召集兵がまだ駐屯していた。私が撫順へ帰ってから二、三日してこれらの召集兵達は奉天へ集結して、そこで解散になるのだと隊列を組んで奉天へと出発した。撫順の近所から召集された知人も沢山いた市民は沿道で見送った。し

かしこれ等の召集兵は奉天に着くや直ちに汽車に乗せられ、ソ連兵監視のもとで全員シベリアへ送られたのである。しかもなお、関東軍がソ連への報告数より人員が足りないというので盛んに兵隊集めが始まった。

主要都市の道路の四ツ辻にソ連兵が立っていて丸刈りの頭をした青壮年を見付けると兵隊だろうといって連れ去ったので、うっかり外へ出れない状況であった。阜新で別れた撫順出身の林君も遂に撫順へは帰って来なかった。

運は紙一重だと我が身のさいわいを喜んだ。

日本人居留民会の設置

八月二十二日撫順市の自宅へ帰った私は、早速炭鉱事務所へ出頭して無事帰宅したことを報告した。大石重義庶務課長は当方庶務課へ出勤せよとのことであった。

撫順市では間もなくソ連軍が進駐して来るということで、警察署員や市役所の職員は拉致されることをおそれて皆雲隠れし無政府無警察状態となる。そこで早速炭鉱の幹部会議が開かれ撫順市民の避難について討議

された結果、今動揺しては却って命を縮める。家族と共に最後は自決する覚悟で全市民踏み止まり撫順を死守しようということに決したのである。この勇氣ある決意によりおおよその掠奪を免れ、多くの奥地からの避難民を救済し、市民の損害を最小限に止めることが出来たのである。併せて炭鉱の諸施設を保全することとし、宮本慎平炭鉱長が委員長となり、市役所や警察署に代り、日本人居留民会が設けられたのである。

この間大石庶務課長と共に私は各会議に出席していたのであるが九月十三日より日本人居留民会を正式に発足させることになり、撫順女子高等学校前にあった幼稚園を事務所とし

組織は

会長 大石重義（炭鉱庶務課長）

副会長 村松憲吉（土建会社村松組主）

事務局長 浜田紀世次（前満鉄地方事務所）

総務課長 瀬田修一（新聞販売店主）

渉外課長 坂本 某（坂本鉄工所長）

救済課長 碓山邦雄（土建業碓山組主）

配給課長 矢富 某（撫順市経済課長）

でその下部機構は隣組制度をそのまま採用した。私は総務渉外両課の副課長として市民の安全と避難民の救済、ソ連軍、中共軍、国民軍との交渉に全力を尽くすことになった。

居留民会の資金難

民会として困ったのは資金のないことであつた。ソ連軍の命で使役を使った費用、ソ連軍を接待してくれた女性への費用は僅かな寄付金でまかなつたが、難民の衣食住の費用、次から次へと逮捕される日本人救出の費用等には最初閉口してしまつた。

避難民の救済

撫順市には日本人約四万五千人と中国人約三十万人がいた。日本人の大部分は炭鉱従業員とその家族である。そこへ奥地から満鉄社員や開拓団員が家族と共に約四万五千人なだれ込んで来たので、満鉄社員とその家族は炭鉱の社宅へ同居させ避難民は各学校やお寺へ集団毎に収容したのである。

避難民は病人を残し健康な人は炭鉱の作業に出し、

その労賃により集団毎の自治生活をさせ、衣類は撫順在住民から供出を願って支給し、一応衣食住の確保をしてあげたのである。

しかし、その内発疹チフスが蔓延しその上、寒さと栄養失調のため、ばたばた死んでひと冬越えた二十一年春の雪解けには収容所によっては半数以上の死者を出したところもあった。

ソ連軍の進駐

ソ連軍が進駐すると先ず銀行を接収すると聞いていたので、現金を押収されては避難民の救済どころか経済が麻痺してしまうので、炭鉱並びに市の最高幹部が急遽協議の上、市内全銀行の現金を分散して信用ある有力個人に保管してもらうことにしたのである。又殺気だったソ連兵の気持ちを少しでも和らげるようにと女性の方に全居留民を助けるために是非協力してもらいたいと一定の保証をして、約四十人の方をソ連兵の接待婦としてお願いしたのである。

前述の各会議に私は出席していたのである。

八月二十七日からザレックスキー少将指揮下のソ連軍

が続々進駐して来た。

先ず撫順市の行政機関や炭鉱の生産部門の接収に当り、ソ連将校がそれぞれの部所長に就任し、日本人をその下に副として配置し、炭鉱の採炭作業を従来通り継続させた。

この人達は多少秩序はあったが、駐屯の軍政部隊は文盲のダワイ部隊で通行人から持ち物を手当り次第取り上げる。家の中へは勝手に上り物品を持ち去る。婦女子を見つけたれば所かまわず暴行する等、筆舌につくし難い事件が毎日繰り返され、その都度居留民会への訴えが殺到し、私共は不眠不休でその処理に当った。

中共軍の進駐

二十年の年末頃からソ連軍に代わって正規八路军がやって来た。王新三氏が炭鉱長に、孫陪臣氏が警察局長となり治安の維持に当る。八路军はソ連軍のように乱暴はせず規律は比較的厳正であった。しかし早速共產主義の本領を発揮して、日本人の資産家を次から次へと拉致し「君が蓄積した財産は中国人から搾取したのだから明日までに五十万円持って来い」とか「百万

円持つて来い」とかいつて攻め立てるのである。

家族から民会への泣き込みにより、私は通訳の太田政治氏や、杉原寅雄氏と共にその都度貰い下げに行き日本人は現金を持っていないので家財道具を売って持つて来るから、二日待つてくれ民会が保証するからと交渉していると先方から双眼鏡がないかとか、ウォル・サムの時計がないかというような話が出て来るので、よし探してあげようと言って隣組から探し出し今日の家具の売上金だといって一、二万円と双眼鏡なり時計なりを持つて行き、民会が身元引受人となつて釈放してもらうのであつた。部隊は一週間余り滞在すると次の地点へ移動する。そのあと又新しい部隊がやつて来て同じようなことを繰り返すのでつくづく閉口した。

国民政府軍の進駐

翌二十一年三月二十日頃、国府軍が奉天方面から進撃、奉天、撫順間で中共軍と戦闘開始、中共軍が撫順から通化方面に退去するに当り、民会に対し負傷者を運ぶタンカ数百台準備せよとの要求だ。タンカ等ない

ので隣組からドンケルス（麻袋）を物干竿に縫い付けたものを少々渡すと一目散に立ち去る、一方、二、三人の兵士が民会へ来て拳銃を二、三発発砲し、民会内の数十人を外へ連行し金品を強奪して逃走する。

他方市中は無秩序となり、中国人街から日本人街に向かつて暴徒が押し寄せ、家財道具を掠奪し始めたので民会へ何とか助けてくれと矢の催促である。幸い炭鉱社宅街に原田美寿氏が指揮する自警隊がいたので数百人の出動を願ひ鎮圧することが出来たのである。

民会が襲われた時、私は奥の方にいたのでいち早く民会の資金を持つて裏へ逃げ難をのがれたが、その時の恐怖は今もなお身にしみている。

公官借入金制度の設定

避難民の救済、進駐軍の接待、引揚準備等のため各地区共多額の資金を要するので、この資金調達方法として、公官借入金制度をもうけるからと、奉天の北條秀一さんからの連絡により、大石会長と私が奉天に行き、北條さんにその内容を聞き撫順に帰り、早速実施に取りかかる。この制度は日本人の現金を持つてい

人から一世帯五万円を限度として民会が借り上げ、日本へ帰国後政府が返済するというものである。これは誠に名案であった。四月二十六日から国府側の指示により日本人居留民会は撫順市日僑善後連絡所と改められた。そして炭鉱の坪田祐一郎氏が所長となる。

国府軍々政下の市民生活

国府軍の進駐によつて撫順市の治安はやや安定していた。

炭鉱従業員並びに避難民のうち、健康な者は採炭作業に従事して給与を受けていたのでまずは生活に大した不自由はなかった、しかし何時帰国出来るとも分からぬ不安なままで生活を続けることは出来ない。

在来者も避難民も僅かな金で少しでも長く食いつながねばならぬ。そこで衣類始め家具類を売り始めた。避難民で売る品のない者は、餅米や粟等を仕入れて餅を造つたり、菓子を造つたりして女も子供も売り始めた。朝、夜が明けると市中の大通りは歩行も困難なほど物売りで中国人の買い客で毎日大賑わいである。

しかし市中の商店街は暴徒の掠奪を恐れて終戦以来

一軒も残らず、堅くシャッターを降ろしたままであったが、そのうち西四条通りの大きな呉服店の店舗を開放して居留民会監督の下に出店させることになった。私の家内も出店するので一個借り受けることにした。

商品は我が家の物は勿論ですが、その頃私が進駐軍の宿舎にお世話をした南昌洋行（社長斉藤茂一郎）と言う個人炭鉱会社と懇意にしていた関係で斉藤さん方の品物売り捌くように依頼を受けたので販売商品には事欠かなかった。

過労と発疹チフスで倒れる

終戦以来居留民会で昼夜の別なく避難民救済のため、東奔西走、又常に抜身の拳銃の下で進駐軍との折衝で、私は肉体的にも精神的にも疲労その極に達しておるところへ発疹チフスにかかり、二十一年四月に入つて遂に倒れてしまった。そして意識不明にまで落ち入つたが幸い医師の献身的加療により、ようやく一命を取り止めたものの心臓が極端に弱り四、五、六月の中旬まで病床に伏してしまつた。六月中旬になつてようやく

戸外へ出れるようになったので炭鉱事務所へちよつと挨拶に行つたのが心臓にこたえ、それから又一か月寝込んでしまった。

六月末から日本への引き揚げが開始されることになったので病人のため初回に引き揚げさせてもらうことになり弟のようにしていた金沢市出身の入場光太郎君一家が私の家族と共に私の付添いということで七月末十六年間住みなれた第二の故郷ともいふべき撫順市から引き揚げることになったのである。

引揚状況

昭和二十一年三月国民軍の進駐によって治安も維持され、六月から日本人は日本国への引き揚げが開始されることになった。

引き揚げに先立ち日本への持ち帰りの出来ない家財道具を、日本の中国に対する賠償金に引当るのだというこゝで、各家庭の家財道具の調査が始まった。次いで日本への持ち帰り品として一人当り衣類は三着、履物は三足、時計は一個、現金は千円許されることになった。貴金屬を始めその他一切は許されないのである。

郵政儲金簿、郵政有獎儲金證書、満州儲蓄債券、富国債券等は二十一年六月撫順日僑善後連絡所、主任坪田祐一郎氏に預け、預り證をもらつて持ち帰つたのである。

七月中旬撫順を立つまでに三回学校の校庭に並んで下検査が行われ、若し違反者が見つければ全員を持ち物を細密検査されるのであった。かくして私達は七月中旬第三次として撫順を發つたのである。

引き揚げ者の服装は誰も彼も一様に作業服に身をかため、帆布綿で作つた大きなリュックサックに許可された持ち帰り品を詰め込み、そのほかに大きな布袋と水筒を両脇にぶら下げ誠にみじめな姿であつた。

布袋の作成にあたつても、日本へ持つて布切にして利用出来るように考えて作り、中には日本は食料事情が悪いと思ひ粟を詰め込み、途中で若しやのことを思ひアルミ鍋を一個ぶらさげたのである。

いよいよ出発、撫順駅で汽車に乗つたのであるが、この汽車は無蓋の台車で中央にリュックサックを並べ全部を縛り、周囲に坐つて振り落されぬように

皆が繩にしつかりつかまるのであったがその惨めさは何とも例えようのないものであった。

昭和五年九月希望に燃えて渡満し、無事満鉄撫順炭鉱に就職して、家内の歌子と繁忠、睦子、義則三人の子供と共に楽しい家庭、楽しい日常生活を送って来た十六年間に振り返って、今この哀れな姿で引揚げねばならぬかと思うと悲しさが胸にこみ上げて落ちる涙を止め得ず、汽笛が鳴って汽車は発車したが振り返って撫順市を見る気にはなれなかった。と同時に戦争の罪悪と敗戦の悲劇をこれほど痛切に感じたことはなかった。

コロ島で下車し、一旦収容所に入ったが超満員で座ったまま眠らねばならないという惨めさであった。二泊の後、タンカーに乗って、いよいよ帰国の途につく。七月二十六日早朝日本列島の一角が見えた時悪夢から覚めた心地で思わず心で万歳を叫んだ。

上陸は佐世保港で、上陸するとすぐ検疫があり各自、体中DDTを真白に振り掛けられて収容場に入り二日後に、十六年振りに帰郷することになった。

小松駅には七月三十一日家族五人無事到着、駅頭にはそれまで一人暮らして私達の帰国を待ちわびていた六十九歳の父久太郎と、妹初栄の大谷家全員の出迎えを受け共に嬉し涙で再会を喜び合った。時に家族は私が三十八歳、妻歌子が三十七歳、長男繁忠が十五歳、長女睦子が六歳、次男義則が四歳であった。

人生の再出発

郷里石川県小松市に引揚げて以来、私の健康も次第に回復したので、二十一年十一月小松市本折町日吉神社境内の参道西側に引揚者や、戦災者の更生施設として建設されたバラック建の店舗を一店舗借り受け日用雑貨や、古着類の販売を始めた。

この店は家内が担当し、私は同時期、同じ引揚者の友人、坂元孝吉君と橋本助男君と三人で石川県庁へ日参し、石川県に未だ設置されてなかった、引揚者や戦災者の救済事業である高松宮様が総裁の恩賜財団同胞援護会石川県支部の設置方を懇請し十一月末より開業することになった。

この事業は東京駅前の上業ビルの中に本部があり、

各被災県に支部を置き、県の厚生部の管理の下、本部より援護物資を仕入れ引揚者や被災者に証明書提示により頒布し、仕入代金は売上後本部へ送金すればよい仕組で、私達資金のない者に誠に好都合の事業であった。

販売については、私達三人は一切の責任を持ち、金沢市の高岡町に常設頒布所を開設して坂元君と橋本君が担当し、小松市には駅前の丸福百貨店内に小松支所を開設して私が支所長になる。昭和二十三年四月より衣料品が切符制となり呉服店が開業になるまで三人が毎月殺人列車といわれた超満員の汽車に乗り、東京の援護会本部に行き、主として衣料品を貨車一両分ほど仕入れて持ち帰り、主として引揚者に頒布する事業である。物のほとんどない時であり皆さんに大変喜ばれた。

私は二十三年四月この事業を終えてからは家内と共に家内の商売に専念し、二十四年にはそれまで妹初菜の家の別室を借りて家族五人が住んでいたが、近くに売家が出たので二十三万円で購入受け移り住むことに

なった。

その時の喜びは今も忘れられない。

そして五年後の昭和二十六年十一月中央商店街に出で独立店舗を持ち、以来今日に至っているが今は衣料品卸店舗一、小売店舗四を経営し、長男繁忠は協同組合衣料品卸センターの理事長を、次男義則は兄に協力小売部門を担当し協同組合中央商店街の理事長の他、小松市議会議員として家業と共に業界の発展に努力している。

執筆者の横顔

久木氏は八十三歳の自治功労者、地方の少年が憧れた当時の商業学校を卒業するや大陸に志を立てて満州に渡り南満州鉄道の経営する撫順炭鉱に職を奉じた。

当初満州現地人と言葉が通じないが、久木氏の誠心誠意の言動が信頼され、事業発展はみはるものがあつた。

かくて、満鉄の事業は牡丹江省に新たに炭鉱作業所を設け、その難局処理に久木氏が命ぜられ、期待された通り一大発展に導く、ゆくところ可ならざるなき才能を発揮し、満鉄当局から信任あつく若くして財務管

理の経理副科（部）長の重責を負わされたことは久木氏の人格躍如たるものがある。久木氏に天分ありと雖も、彼の誠意天に通ずる信念から発する努力のためのものである。

職場の社会で満州現地人から尊敬され、家庭では三人の子女をもうけ一家団欒花咲くがごとく平和な日に、現地召集にあい戸惑いしたが、尽忠報国の行動が認められて早くも下士官適任証が下附、曹長事務助手を命ぜられ破格の処遇に浴した。

しかるに何ぞ凶らん。日本敗戦となるや、全満州は天地動転、たちまち生と死共存の戦場、正に地獄化した中で久木氏は死を覚悟して千苦万難を切り開いて奔走、中国から賠償がわりに私有財産の供出命令にあえば、邦人救出と併せ、これを実行した、身も心もポロポロにして働き、遂に発疹チフスで倒れ、戦乱の外地で三か月も病床に臥し、医師なく、薬もない中で、ただ生きる執念だけで、天は自ら助くるものを助く譬えの如く奇しくも癒えて、一家五人コロ島から佐世保に引き揚げてくれた。

故里の山の有難きかなと泣き伏しているひまもないごとく、多くの引揚者と共に生きる道をさぐり求め、恩賜財団同胞援護会県支部を設立して引揚者同志の生活安定に努力、自らの営業も繁栄を築いた久木氏は、市議会議員に推挙されて当選、のち議長の重職に就き地方自治に至大の貢献者。

因に、市社会教育委員、文化協会長、日中友好協会長、音楽文化協会長、水泳協会長、なお今も石川県老人クラブ連合会長として健康福祉に献身している。

久木氏は数多くの大臣表彰や韓国総領事から感謝状を受章し、昭和五十五年四月、勲四等瑞宝章に輝いた。外地から、たった一千円だけ所持することを許され丸裸で引揚げ以来の苦勞人、久木氏等を首相招宴の席で、彼的人格は巨万の富にまさる。と評された大平正芳総理大臣の言葉は久木家一門へ永久に光彩を放つた、こりかたまった努力型である。

（社引揚者団体全国連合会）

副理事長 結城 吉之助